

ふるさと再発見!

vol. 19

ほろほろわかやま

FREE

相撲 古今五虎勝

鬼勝象之助

紀伊の産物
形丈七尺八寸
冠紐の
象之助

目子
鬼子勝

男の
うしろ
かみ
かみ
かみ



巻頭
特集

江戸角界のトップランナー 技と錦の紀州相撲

散策
わかやまの先人
文化
I♥WAKAYAMA 私の和歌山

すさみの山に涼を求める ~広瀬谷溪谷~
懸賞歌謡の巨星 西川好次朗
技術を引き継ぐ者たち。~紀州へら竿~
日本遺産のまち「和歌山市」



東照宮縁起絵巻 = 紀州東照宮所蔵

江戸角界の

トツプランナー

―技と錦の紀州相撲―

和歌山は相撲どころ。大相撲に多くの力士を輩出し、学生や社会人の部活動も盛んだ。和歌山の相撲人気は筋金入りで、その起源は、遠く江戸時代、相撲好きだった殿様が多くの力士を抱えた時代にさかのぼる。現在の相撲の基盤を築いたとも言われる「紀州相撲」とは―。

紀州の殿様は相撲が好き

古来、神事や宮中行事、また武道の鍛錬として行われていた相撲が興行として組織化されたのは、江戸時代の初めごろと言われる。しかし、黎明期の相撲興行は勝敗をめぐる喧嘩沙汰が絶えず、たびた

び禁止令が出されていた。江戸や大坂といった大都市の相撲興行も、17世紀中ごろには約30年間の中断期間がある。そんな時期、多くの力士を迎え入れ、育成に励んでいたのが紀州藩だった。時の藩主は、紀州徳川家初代の頼宣。続く二代・光貞も相撲を好み、名だたる力士を育成した。相撲

紀州相撲がルール

興行は中断ののち、元禄年間（1688～1704）ごろから地盤が固まっていくが、そのころ主役となった力士の多くは、紀州藩のお抱えだった。黎明期の角界をリードした紀州のスタイルは、当然のこ



県内では盛んに大会が開催されている。
= 県営相撲競技場、平成29年度県高校総体



和歌山県内には、相撲関係の絵馬が奉納されている神社が多い。写真は応供寺（和歌山市）土俵が四角形の珍しいもの。

とながら、他の地方の力士たちにも大きな影響を与えた。

ひとつは、相撲の技術である。

元禄年間の紀州徳川家お抱え力士・鏡山沖之右衛門は、柔術を取り入れた技術で「天下無双相撲ノ名人」「十寸穂の薄」と呼ばれた。この鏡山に学んだ力士たちの一団が「紀州相撲」と称され、その技は紀州以外の力士にも波及していくことになる。

また、当時の立ち合いは立ったまま行うのが一般的だったが、紀州相撲では、土俵に手を下ろしてから取り組む型を採用。現在の立ち合いにも通じるこの型は「紀州流」と呼ばれた。

錦織りなす 紀州まわし

紀州相撲をルーツとするあれこれのなかで、忘れてならないのは「紀州まわし」の存在だ。現在の大相撲でも、華やかな化粧まわしを付けた力士の土俵入りは見物のひとつだが、その始まりは、華やかな織物で作られた紀州相撲の下帯だとされている。

江戸時代の相撲の事典『古今相撲大全』には、紀州まわしについて「華美眼をおどろかすみごとさ、言語にのべがたし、それより次第にわれおとらじと風流をつくすことになりたり※」とある。紀州まわしのきらびやかさが流行を生ん

※【大意】華やかさ、目を驚かせる見事さは言葉にできないほどだ。それから次第に皆が競うように美しく飾ようになった。



和歌祭りで見られる力士の行列。紀州まわしが華やか。= 紀州東照宮所蔵

だことがうかがわれる。現在、紀州東照宮の和歌祭りの行列には、紀州まわしを締めた力士が登場する。紀州相撲の往時をしのばせるその光景は「相撲どころわかやま」ならではの風物詩と言えるだろう。

<取材協力・表紙写真提供>
公益財団法人 日本相撲協会

個性あふれる 紀州藩のお抱え 力士たち

の天保年間に描かれたもので、古今東西の名力士5人を紹介する内容となっている。活躍した時代から200年を経て描かれた絵であり、鬼勝が伝説的な名力士として認識されていたということの方がわかるもの。

鬼勝の墓がある正住寺（和歌山市東長町）には、鬼勝が紀州公から拝領したという刀が伝わっている（県立博物館蔵）。その長さは180センチ以上もあり、鬼勝はこれを差して歩いていったという。

29歳（一説には18歳）の若さで没したと言われており、強さを妬まれて毒殺されたという説もある。

おにかつぞうのすけ
鬼勝象之助
天下に名だたる大男

表紙の錦絵で描かれているのが、17世紀前半に活躍した紀州藩お抱え力士、鬼勝象之助である。絵の詞書には「身丈七尺八寸」とあり、現在の単位に換算すると、何と2メートル34センチ。とてつもない大男である。

この錦絵は、江戸時代末期

改名したようである。

船乗り10人以上で立てる千石船の帆をたったひとり立ててしまったなど、腕力に関する数々のエピソードが伝わっている。また、短気な力士としても知られており、一度負けた相手をその後の取り組みの際に殺してしまったという話もある。

はっかくたてのすけ
八角楯之助
世紀の大金星

9年間も無敗を続けた名力士・初代谷風梶之助に土をつけた。紀州の行司・尺子一学から「待った」を伝授され、谷風との取組の際もいつまでたっても立ち合わなかったという。それによって相手の平静を奪い、勝利をつかんだ。

人間的には負けず嫌いで稽古で石鎚をしばしば下したため、ひどく怒らせたというエピソードも伝えられている。

いしづちしまのすけ
石鎚島之助
常識はずれの剛力

鬼勝と並ぶ力自慢の力士で、18世紀前半に活躍した。もとは白山新三郎と名乗っていたが、後年に石鎚島之助と

かがみやまおきのえもん
鏡山沖之衛門
紀州の相撲マスター

17世紀後半の元禄年間に活躍した力士で、石鎚や八角の師匠にあたる。紀州関口流の柔術を習い、それを相撲に取り入れ、新しい相撲術を生み出した。鏡山は多くの力士にこの技術を教えたため、各地で流行することとなる。

鏡山の立ち合いは、中腰の前傾姿勢だったという。当時

の立ち合いは立ったままが主流だったので、相手より低い姿勢で当たることになり、低い体勢と柔術の技で向かうところ敵なしだったようだ。そのため、多くの力士が中腰を採用するようになり、これが手をつくスタイルの「紀州流」につながったことは想像にかたくない。

なお、紀州関口流には、家元が鬼勝を投げたという逸話が伝わっている。



鬼勝の墓 = 和歌山市東長町の正住寺



そして現在へ。

全国でも若い少年力士たちの活躍が目立ち、県庁に務める社会人力士が全国優勝したりと和歌山は今も相撲どころだ。そんな伝統を背負う若き力士と教育者、それぞれに話を聞いた。

この地で強くなりたい

県立和歌山商業高校に通う高校一年生の花田秀虎^{はなだひでとら}君は、中学生時代に全国で個人総合2位になった



気迫の立合いをみせる花田君

将来を嘱望される力士だ。

そんな彼が相撲の魅力を嬉しそうに語ってくれた。「子供の頃たまたま出た相撲大会で優勝しました。そこで相撲の面白さに夢中になりました。相撲には引き分けがなく必ず決着がつきます。厳しいところもありますが、そこが最大の魅力だと思っています」。

和歌山出身の関取には、元関脇の柝乃和歌や久島

DATA

和歌山市少年相撲教室では、毎週土・日曜日の10時から少年相撲の稽古が行われている。随時参加者募集中。

【住所】和歌山県和歌山市有田屋町5

海らがいるが、彼の見据える目標はそんな先達にも負けないくらい高い位置にある。「先輩力士の後を追っていざれば角界に入り、大相撲の頂点を目指したいと思っています。そのためにも、まずは高校で全国制覇を果たしたい」。遥かな高みを目指しながらも、次なる一步を見定めている。そこには彼の和歌山に対する思いがあった。

「相撲の世界で自分が活躍することで、相撲文化のある和歌山に元気を与え続けたい。それが僕の夢です」。どの質問にも真正面から答える彼の柔らかな語り口には、その取り組みと同じように横綱相撲の姿勢が貫かれていた。

相撲で生きる力を高めてほしい

「相撲では、心・技・体この三つを高いレベルで維持できなければ勝つことはできません。逆に言えば、体に恵まれなくても他の二つを懸命に磨けば自分より大きな者にも勝つことができます」。

県立和歌山商業高校相撲部の監督を務める門林三千生^{もんばやし}さんは、言い回しを変えながら何度も、勝つために努力すること、挑戦していく気持ちの大事さを言葉にした。「この前へ向かう気持ちは子どもたちが社会に出て、困難な壁にぶつかった時、それを乗り越えるのに必ず役立ちます」。

教育者としての立場から現代を捉え、相撲を通して子どもたちの成長を考え続けている。そんな彼は、監督や公式戦のレフェリーを務める今でも、生徒たちと体をぶつけ合い共に稽古に励んでいる。



レフェリーを務める門林さん(中央)

すさみの山に 涼を求めろ

～広瀬谷溪谷～



琴の滝

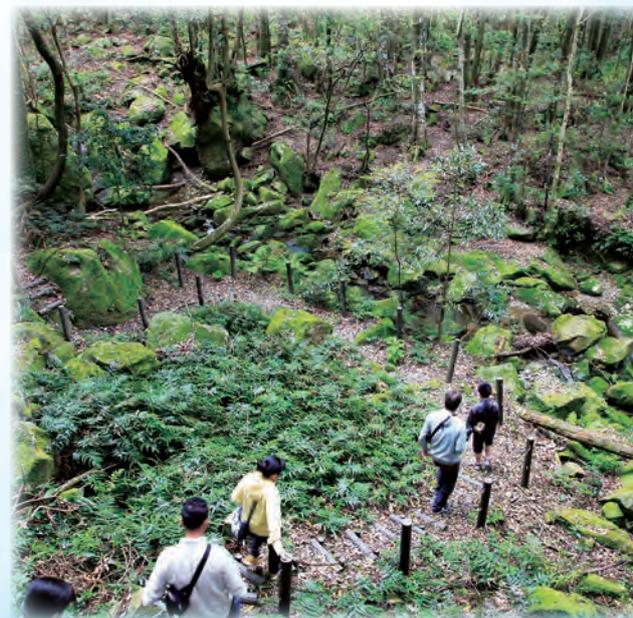
南紀熊野ジオパークのジオサイトに選定されているダイナミックで美しい海岸線、ケンケン船によるカツオ漁などの漁業が有名なすさみ町。恋人岬から見る夫婦波や、エビとカニの水族館などの観光スポットがあり、海へのイメージが強いが、今回の散策は涼を求めて山へむかう。

今回の散策コースである広瀬谷溪谷は、周参見川の支



元服の滝

流で大小10余りの滝を楽しむことができる遊歩道が整備さ



遊歩道

木漏れ日のなかを溪流に沿って歩けば、野鳥のさえずりや季節の植物を楽しむことができる

れている。紀勢自動車道すさみICをおりて車で走ること5分、遊歩道のスタート地点である琴の滝荘に着く。遊歩道は片道1kmほどあり往復で約1時間という短時間で楽しめる行程だ。



朝虹の滝

溪流に沿って遊歩道を歩いていくと、すぐに鬱蒼とした森に入る。遠くからはザアアと水音が聞こえ、ひんやりした空気に包まれると、第一の滝「元服の滝」が現れる。

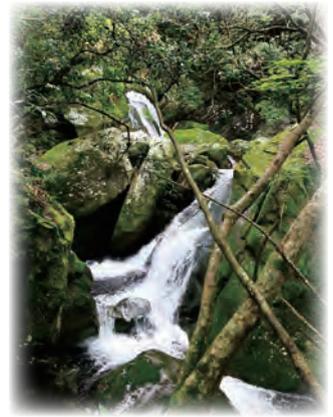
再び進むと第二の滝「鮎尻の滝」。少し進んで滝、少し進んで滝と連続して大小様々な滝を見ることが出来る。それだけに遊歩道のアップダウンがきつく、苔むした足元が滑りやすいので注意しなければならない。



青苔の滝

遊歩道の最終地には、溪谷の最大の滝である「琴の滝」がある。落差が20mあり滝壺からのミスト状の水しぶきがあたりを包み込む。木漏れ日に照らされた滝の音は心地よく、ずっと聞いていられる。

この滝壺には伝説があり、影を食う牛鬼というおそろしい化け物が住んでおり、影を食われた人は必ず命を落としたりという。恐れた村人は正月に牛鬼に酒を供えたところ、酒好きな牛鬼はそれ以降は村人の影を食べることがなくなつたという。



河鹿の滝

ICからアクセスが良い森林の散策コース。夏の散策には最適である。すさみ町にある海のレジャースポットとあわせて楽しんでみてはいかが。



琴の滝荘

〒649-2621
和歌山県西牟婁郡すさみ町周参見 55 番地
TEL 0739 (55) 4335
FAX 0739 (55) 4744
【アクセス】紀勢自動車道すさみ IC から
古座・佐本方面へ約5分
<http://kotonotaki.ikoi-w.com/>

すさみ八景の一つ、「琴の滝」の渓流沿いの景観が素晴らしい静かな宿。

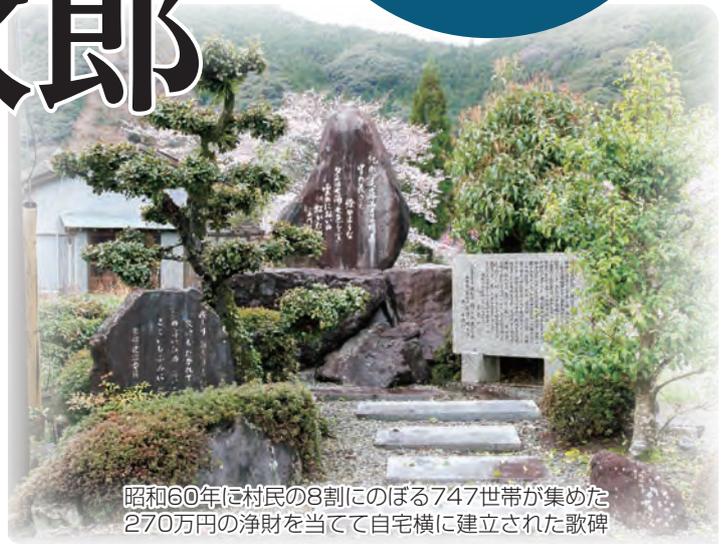


ペットと泊まれるログコテージも備えている

巨星

懸賞歌謡の

西川好次郎



昭和60年に村民の8割にのぼる747世帯が集めた270万円の浄財を当てて自宅横に建立された歌碑

♪ほのぼのと かおる^{はまゆう}浜木綿
陽に映ゆる 緑の起伏 和歌山は～

先の紀の国わかやま国体でも
合唱された「和歌山県民歌」
この歌を作詞した西川好次郎とは
どのような人物であったのか

歌人西川好次郎

西川好次郎は明治36年10月、垣口家の次男として日高郡寒川村に生まれる。後に旧川上村の西川家に養子縁組され西川姓となる。

地元寒川で親交のあった福島さんによると、好次郎は幼い頃からとても繊細な感覚の持ち主で、物事をよく観察し、また表現豊かな人物であった。その才能は家族も認め、兄弟が家の仕事を手伝っている中、好次郎には勉強を優先させたという。

好次郎は小学校高等科を卒業したのち、植林の仕事で和歌山市を訪れた際、紅葉溪納涼音頭の作詞募集を知り、これに応募し当選。五十銭（当時の日当に当たる）の作詞料を得た。これがのちに懸賞歌謡の巨星と呼ばれる最初の一步であった。

その後、寒川第一小学校の教員を経て、川原河小学校の教諭となる。そして昭和8年、



村役場（現在の日高川町役場美山支所）のほど近くにある自宅兼食堂

報知新聞社が皇太子（今上天皇）の誕生を記念して歌詞を一般公募した「皇太子殿下御降誕奉祝歌」に応募、応募作品数約五千八百の中から一等入賞を果たした。選者の一人、文学博士の佐佐木信綱は「莊重、雄快の作に加えて作曲上の字脚、音楽的効果、詩趣のゆたかさのこもったもの」と評している。これ



西川好次郎氏

を機に
好次郎の元には作
詞の依頼が殺到したという。

西條八十との 出会い

昭和12年7月7日、日中戦争勃発。好次郎は司令部付の事務官として招集される。中国の漢口の基地に就いていたとき、日本からの報道班として現地に訪れた詩人の西條八十に出会う。好次郎は走り書きした「漢口晴れて」という歌を西條に手渡したところ、歌を読んだ西條は感銘を受け「内地に帰ったら、必ず訪ねてください」と言い残した。後日、日本に帰った好次郎

技術を 引き継ぐ 者たち。

— 紀州へら竿 —

釣りの最高峰と言われるへら鮎釣り。
その難易度の高さに魅了された釣り師
たちが使用する専用の釣竿がへら竿だ。
和歌山県橋本市は「紀州へら竿」の産地
として知られている。
100年以上の伝統技術を受け継ぐ竿師
の山上寛恭さんにお話を伺った。

へら鮎には

和竿が最適

釣り竿の材質は、現在ではカーボン製が主流となっている。しかし、へら鮎釣りには竹製の和竿を使用する愛好家が多い。竹の持つしなやかさや弾力性が、わずかなアタリの感触から、水中を右へ左へと動き回るへら鮎の動きまで手元に伝えやすいからだ。

へら鮎との駆け引きを愉しむ釣り師たちにとって、一度は手にしたいと憧れる逸品が「紀州へら竿」である。

和歌山県橋本市は、紀州へら竿の産地で和竿の全国シェア9割以上を占め、年間約2

500本を出荷している。

複数の竹を組み合わせる製
造技法は、明治15年（18
82）に大阪市の竿師「初代
竿正」の手によって確立され
た。竿正の孫弟子に師事した
橋本出身の竿師2名が地元で
独立したことにより、昭和初
期から本格的な生産が始ま
る。へら鮎釣りブームや原料
となる良質な竹の産地であつ
たことから地場産業へと発展
していった。昭和63年（19
88）には、その歴史・技
法・品質などが認められ、県
から「伝統的工芸品第1号」
の指定を受ける。

その後、平成25年（201
3）には国の「伝統的工芸
品」に指定された。



個性が光る 機能性と美しさ

「竹の良し悪しを見極める目を持つことが大事で、材料探しには苦労します。」と話す山上寛恭さんは、「こま鳥」の銘で知られる竿師。

高校卒業後、昭和45年（1970）に父である初代こま鳥に入門するが、9カ月後に父が他界してしまい、その後は伯父に師事し、竿師として47年活躍し続けている。

へら竿づくりは、竹の切り出しから仕上げまで一人の竿師がすべて行う。竹林に分け入って良質の竹を採取し、乾燥に数年かける。それらの中から良いものを選び、半年以上をかけて完成させる。

材料に使用される竹は3種類。穂先（竿先）は真竹、2番の穂持ちは高野竹、3番目以降は矢竹と組み合わせた継ぎ竿で、それぞれの竹が持つ特徴を最大限に活し、約130もの工程を長い時間と技巧をつくして仕上げられる。

山上さんの竿は、持ち手部分「卵殻握り」と呼ばれる卵の殻を細かく割って鳥や虫などの貼り絵にした細工が施されている。釣り道具としての機能性にとどまらず、遊び心と個性が光る工芸品だ。

「技」と「人」を 育てる取り組み

グラスファイバーやカーボン素材の品質向上、海釣り人



気などにおされて、最盛期の1950年代に約150名いた竿師が、現在では37名にまで減少している。

山上さんを含め弟子を持たない竿師も多く、平均年齢60歳以上であり、後継者問題は深刻だ。従来の師弟制度では新たな人材の確保は難しい。

紀州製竿組合では、複数の竿師が交代で後継者育成をする学校形式の「工房」を開校している。

これには講師

となる竿師それぞれの優れた技術を習得できる利点があり、2年間の基本カリキュラムを修了した後は、師弟制度にも編入できる。修行に最低5年はかかる竿師への独立を早めることも期待できるといふ。これまでに7名を輩出し、現在も1名が研修中だ。

また、フィッシングショーへの出展や、全国ヘラブナ釣り選手権大会（ヘラブナGP）の開催、地元の小中学生を対象とした体験教室などの普及活動にも余念がない。

これからも、高度な技術と伝統を絶やすことなく後世に残してほしいものだ。

取材協力 山上寛恭氏（こま鳥）

〒648-0072 和歌山県橋本市東家3丁目4-9
TEL&FAX 0736-32-3707

郵便はがき

6 4 0 8 7 9 0

和歌山市梶取 17-2

株式会社 ウイング
「ほうぼわかやまクイズ
&プレゼント」係

料金受取人払郵便

和歌山中央局
承認

2259

差出有効期限
平成30年3月
31日まで



ふりがな			
お名前			
年齢	歳	性別	男 <input type="radio"/> 女 <input type="radio"/>
ご住所	〒		
電話番号			
クイズの答え	1	2	3
本誌の入手場所	※あてはまるものを1つお選びください。		

※応募くださいました個人情報は、プレゼントの発送及び弊社からのお知らせ以外には使用しません。

千三百年の歴史・文化が織り成す和歌の浦の景観

『日本遺産のまち 和歌山市』

和歌山市長 尾花 正啓



尾花市長

今号で特集させていただいているように、紀州では江戸時代以来、相撲が大変盛んですが、ほかにも、和歌山県指定無形文化財の関口新心流柔術、岩倉流泳法など、和歌山市には紀州藩の武道の伝統が今も受け継がれています。この武道の伝統は、約400年前から行われている紀州東照宮の例大祭「和歌祭」の祭礼行列にもみることができます。和歌の浦の海の景色を背景に練り歩く、勇壮な相撲取りや薙刀振り、甲冑武者など、紀州人の心意気を今に伝えてくれます。

また和歌祭でもうたわれる「わかしの浦に 潮満ちくれば瀧を無み 葦辺をさして 鶴鳴きわたる」という和歌は、千三百年前の万葉の時代に和歌の浦の景観を讃えたものです。和歌の神をまつる玉津島神社、学芸の神をまつる和歌浦天満神社、西国巡礼の霊場である護国院（紀三井寺）など、多様な歴史と文化が積み重なった和歌の浦の景観が、この度、「日本遺産」に認定されました。千三百年の歴史・文化が織り成す景観をぜひ体感してください。



不老橋

編集後記

読者のみなさま、いつもお読みくださりありがとうございます。「ほうぼわかやま」の19号をお届けします。年2回夏と冬に発行している弊誌ですが、19号ということは、次回は20号。つまり発行10年を迎えることになりました。これも、編集スタッフの努力の積み重ねと、応援してくださる読者のみなさまのおかげです。ありがとうございます。というわけで、次号は通常よりも少し豪華な内容をお届けできたらと企画を進めています。ぜひご期待くださいませ。ご要望・ご提案がございましたら、お電話・メールでお聞かせくださいね。さて、今月は自画自賛と叱られてしまうかもしれませんが、かなり粒ぞろいの興味深い記事をお届けできたと思っています。いかがでしょうか？多くは語りませんが、特集「紀州相撲」も面白いですし、散策の「すさみ瀬谷深谷」、伝統工芸の「紀州へら竿」、そして、西川好次郎さん！すごい人ですね。この記事を読んだ後は、ぶんだら節にさらに愛着がわきますね。今号もふるさと和歌山の魅力を再発見していただけたでしょうか？では、また20号でお会いしましょう。 第19号編集長 岡 京子



おかげさまで、弊誌は創刊10周年を迎えます。次号はページ数を増やした**記念特大号**になります。どうぞ、ご期待ください。



株式会社ウイング印刷物を中心に販売促進のお手伝いを専門とする会社で、「ほうぼわかやま」の発行や本づくりを通じ、文字による地域文化の振興を目指しています。自費出版のご相談はウイングまで！
[沿革] 創業1972年。設立1981年。

ほうぼわかやまのバックナンバーは弊社ホームページからもダウンロードできます。詳しくはウェブで検索→ <http://w-i-n-g.jp> **ウイング 和歌山** 検索

協力機関 本誌を作成するにあたり、次の機関・団体にご協力をいただきました。厚く御礼申し上げます。(順不同・敬称略)
和歌山市、公益財団法人日本相撲協会、和歌山県相撲連盟、紀州東照宮、
詔賢山正住寺、すさみ町観光協会、すさみ町琴の滝荘、三尾屋商店、山下寛恭【こま鳥】

クイズとアンケートで 当たる!!

クイズにお答え頂いた方の中から抽選で「北斎漫画相撲ハンカチ」を1枚
合計8名様にプレゼント!! 色はお選びできませんのであらかじめご了承ください。

問題 華やかな織物で作られた紀州相撲の下帯がルーツだとされているものは？

①化粧まわし ②大銀杏 ③相撲甚句
Vol.18の答えは③アメリカ村でした。

応募方法
このハガキの各項目をご記入後、切り取って投函(切手は不要です)もしくはメールにてご応募ください。 houbu@w-i-n-g.jp

メ切 2017年10月末日

ヒント 本号のどこかに答えが載っています

本誌へのご意見・ご感想

ご協力ありがとうございました。